

元気のヒント

◁91▷



徳島大学病院
呼吸器・膠原病内科医師
吾妻 雅彦

「ぜんそく」という言葉を一度は目にしたり、耳にしたことがあります。正式には気管支ぜんそくと言います。子どものぜんそくはアレルギーとの関係がはっきりしており、成長とともに治ってしまうこともあって、大人のぜんそくとは違いがあります。今回は、大人のぜんそくについて説明します。

ぜんそく

しきなどが出る病気です。

(図) 診断については①せき、ぜんめい、息苦しきの症状がある②気管支が狭くなったり、元の太さへ戻ったりする(可逆性の気流制限)③ちよっとした刺激でぜんそくの症状が出る(気道過敏性の亢進)④気管支ぜんそくと似ている別の病気ではない以上の4点が確認できると、ぜんそくと考えてよいとされています。最近注目されているCOPD(慢性閉塞性肺疾患)は、ぜんそくとよく似ていて区別が難しい場合や、ぜんそくに合併しているときもあります。

治療の基本は、吸入ステロイド剤をきちんと使うことです。発作という分かりやすい症状があるため、発作の時だけ病気を考え、発作用の薬だけを使う人もいます。気管支ぜんそくは、高血圧などと同じく慢性的の病気なので、毎日、薬を使うことがとても大切です。

気管支が腫れ息苦しく

ステロイド剤で発作予防

取れませんが、次の発作を予防できます。20年以上前、発作用の薬を定期的に使う治療を中心にしてきたころは、ぜんそくで亡くなる人は年間6000人を超えていました。発作自体が気管支を傷付けるので、気道炎症を抑え、発作を起こさせないことが治療の目標になりました。気道炎症を抑える力の強いステロイド剤を吸入する治療が広がりました。

この結果、ぜんそくで亡くなる人は、2013年には1728人まで減っています。副作用を気にする方もいますが、ぜんそくで使う吸入ステロイド剤は飲み薬に比べ、非

常には少ない量です。また、飲み込んでしまっても分解されるので、ステロイド剤として体中に広がらないよう安全に配慮して作られています。使ったすぐに効果が実感できないのと、吸入するのにコツがいるため、治療をやめる人がいるのが問題になっていました。飲み薬やテープの薬もありますが、吸入ステロイド剤に追加して使うことが勧められています。

気管支ぜんそくであることが分ければ、息苦しくなくても、吸入ステロイド剤を毎日きちんと使って治療するのが大切だと考えられます。

(第2土曜日に掲載)

